エンジニア　ディアレスト・ウィッシュ

とある技術者の切なる願い

-レイジングライガー誕生秘話-

著者／流遠亜沙

原作／紙白

ASSAULT-SYSTEM 文庫

■レイジングライガー　機体解説

戦闘によりゾイドコアに致命傷を受けたライガーゼロオーガのコアにレイジウルフのコアが融合、誕生した新たなゾイドコアに合わせて建造された機体。

本機はロゼット・コダールの考える「究極のゾイド」のコンセプトで建造されており、ロゼットの持てる技術と L.C.Factory の全スタッフの総力を持って完成させたハイスペック機。

フレームデータこそオーガの物を下地にしているもののメインフレームを始め多くの重要内部パーツを「L.C.メタル」という特殊精製合金群で作製されておりその機体反応速度は神経並みと言われている。

ライガーゼロオーガと同じ特殊な冷却機能を持った装甲と塗装を施しておりレイジシステム使用時は機体に溜まった熱を赤外線に近い波長の光に変換して大気中に放出する為、装甲色が紅く変化する。

機体特性としては「完全野生体コア採用機」の長所と短所をそのまま伸ばして行った様な機体で、パイロットとの高い精神リンク(絆ともいうが）を持っていることが前提の構成であり、人機一体となった時に発揮されるスペックは文字通り唯一無二ともいえる程のものではあるがその反面、機体とパイロットとの間に精神的な齟齬が生じた場合そのスペックが極端に低下してしまうという欠点も持っている。
兵器としては欠陥品であるが、有る意味ではもっともゾイドらしい機体。

型式番号：	LCZ-000
用　　途：	攻撃、対機甲、対ゾイド
全　　高：	14.7m（武装含む）
全　　長：	27.0m（尻尾含む）
重　　量：	131t
最高速度：	450km/h（通常時） 590km/h（オフェンスモード時）600km/h 以上（オフェンスモード２時）
武　　装：	AZ-25mm バルカン、AZ-70mm フュージョンライフル×2（射撃／近接）、プラズマカノン改、レーザーファング、ストライクレーザークローⅢ
特殊装備：	RAGE SYSTEM　Ⅱ、S・C・S（Sympathy・Communicator・System）、ハウリングバスター

技術とは研鑽(けんさん)を積む事で向上する。
挑戦(トライ・アンド・エラー)と失敗の積み重ね。
一つの成功は次に繋がり、発展し、進化していく。
様々な結果が結び付き、また新たな成功が生まれる。
革新的な技術や発明とは、一朝一夕に成し得るものではないのだ。

ロゼット・コダール。
彼女もまた、研鑽を積み、いくつもの成功を経て、今に至っている。
巨大な爪を持つモノ――〈ジェノクラウエ〉。
消えるモウキン――〈バニッシュラプター〉。
怒れるオオカミ――〈レイジウルフ〉。
そして、『悪鬼』の名を冠された〈ライガーゼロ・オーガ〉。
これらは彼女が手掛けた代表的な『作品』の一例にすぎない。
兵器を『作品』と表するのは語弊(ごへい)があるかもしれないが、彼女が関わったゾイドや武器は、兵器と呼ぶには似つかわしくない美学を見る者に感じさせる。
故(ゆえ)に、彼女の手掛けた兵器は『作品』と呼ばれる事が多い。
機能美と造形美。
その二つを併せ持っているのなら、それらは兵器であっても『作品』と呼ばれるべきだろう。

これは――そんな作品達を生みだした技術者の『想いと願い』の記録である。

とある技術者（エンジニア）の切（ディアレスト）なる願（ウィッシュ）い

-レイジングライガー誕生秘話-

パソコンのモニターと長時間『にらめっこ』をしていると、当然だが――目が疲れる。適度に休憩を取るべきだと判ってはいても、調子が良い時と、行き詰っている時は、ついつい根(こん)を詰めてしまう。

ちなみに、現状は残念ながら後者。

とある企業からの依頼なのだが、求められる通りの性能を発揮するため、装甲材の選択をし、強度計算を行い、それを実際に使った際の機体重量を計算し、それによって基礎構造(フレーム)に掛かる負担に問題が起き、装甲材を変えるか、基礎構造(フレーム)の強度を上げるかで悩み、それによって新たな問題が起こり、その解決法を模索し……以下、無限ループ。

そんな事を半日も続けていれば、作業効率も落ちて当然。

そこで私は気分転換をする事にした。

モニター上に映し出されている依頼のデータファイルを閉じ、別のデータファイルを立ち上げる。ファイル名は『RAGING-LIGER_ver.1.75』。

新たに映し出されたのは一体のゾイドの設計図。別の表示窓(ウインドウ)には仕様書や計算ソフト、メモ用のテキストファイルなどが重ねて表示されている。

「ふふふ」

疲れで妙なテンションになっているためか、つい笑いがこぼれてしまう。気分転換に似たような事をやってしまう自分に対する苦笑もあるが、これは新たに立ち上げたデータファイルに対する喜びが大きい。

それは私の『夢』だから。

「――ロゼット主任、ヤバい顔になっています」

「!?」

ここは私の執務室。だから、私しかいないはずなのに、私以外の声が肉声で聞こえれば、それは驚くに決まっている。

「え、いつの間に……?」

パソコンのモニターから視線を上げれば、マグカップが載せられたトレイを手にした研究員がいた。見た目は二十歳そこそこくらいに見える若い娘で、まだ白衣に着られている感がある。今年の春に来た新人で、彼女の淹(い)れてくれるコーヒーは所内でも評判が良い。

「ノックはしたんですが、返事がなかったので入らせてもらいました。あ、コーヒーです」

そう言うと、彼女はコーヒーが湯気を立てるマグカップを私の机に置き、パソコンのモニターを一瞥(いちべつ)した。

「依頼に煮詰まって気分転換ですか。気持ちは判りますけど、その手段が同じような内容というのは……」

彼女は雑用係ではなく、れっきとした研究員なので、企業からの依頼内容も知っている。なので、私が気分転換という名のサボりをしていても、責めないでくれるのがありがたい。

まあ、呆(あき)れられてはいるけども……。

「あはは。よく言われるよ、『お前は仕事馬鹿(バカ)だ』って」

実際には仕事じゃないけど、私は趣味が高じて技術者になったようなものだから、他人から見たら仕事と趣味の区別はつかないと思う。

「あの依頼、指定の期間でこなすのは無理があると、他の所員も悲鳴を上げてますよ?」

「確かにそうだけど、『ここまで出来ています。もう少し猶予(ゆうよ)をもらえれば、完璧なものに仕上げられます』って言えば、だいたい融通(ゆうづう)してくれるよ。向こうもかなり急いでるみたいだけど、この期間であの依頼内容をこなせる所なんて、他にないだろうしね」

「主任は、そこまで計算に入れて、あの依頼を受けたんですか?」

「うん。私は無理な事はやらないよ」

これでも私は責任者だから、無理な依頼なら断らないといけない。失敗をして、所員を路頭に迷わせる訳にはいかないから。

「でも、他の所員には秘密ね。今は悲鳴を上げるくらい、がんばってもらわないといけないから」

「主任って、おっとりしているように見えて、腹黒――いえ、策士なんですね」

私の言葉に彼女が苦笑で答えた。何か言いかけて訂正したみたいだけど、なんだろう?

「これって、〈ライガーゼロ・オーガ〉の強化プランですか?」

話題を変えるように、彼女がパソコンのモニターに表示されている設計図を見て言った。

〈ライガーゼロ・オーガ〉は、私が〈L．C．ファクトリー〉を立ち上げてから手掛けたライオン型ゾイド。〈ライガーゼロ〉を大幅にカスタマイズした一つ(ワンオフ)だけの機体。

「ううん。ノウハウは活かすけど、ほぼ新型になると思う。まだ設計も済んでないけどね」

「仕様書を見せてもらってもいいですか?」

「どうぞ」

研究員としては気になるのだろう。仕様書の表示窓(ウインドウ)を前面に表示して、私は彼女がそれに目を通しているうちに、マグカップに口をつける。うん、やっぱり彼女が入れたコーヒーは美味しい。

「なんというか……すごいですね」

「うん?」

仕様書を読み終えたらしい彼女の声には、感心と困惑が複雑に入り混じっているように感じた。

「これが〈Kamishiro（カミシロ）〉の称号を受け継ぐ技術者の仕事なんですね……。私、〈L・C・ファクトリー〉に来て良かったです」

彼女はそう言うと、私に羨望の眼差しを向けてから部屋を出ていった。

あんな風にまっすぐに言われると、さすがに照れる。

「〈Kamishiro〉か……」

彼女が言った〈Kamishiro〉というのは、ゾイドに関する高い技術を持った者に与えられる称号で、私は祖父からそれを受け継いだ。勘違いされがちだが、これは『世襲制』でなく『襲名制』。私の両親は技術者の道を進まなかったので、継承者はコダールの血筋以外の人間になるか、祖父の代で途絶えると言われていた。

祖父はそれでも良かったみたいだし、私を継承者にしようなんて思っていなかったと思う。ただ、技術に興味を持っていた孫娘――つまり私に、純粋に色々な事を教えてくれただけ。

お人形遊びより家電製品を分解するのが好きで。

おままごとより基盤のハンダ付けが好きで。

中等部（ジュニアハイ）に上がる頃には、車の整備が出来る女の子になっていた。

私はそれが嬉しかったし、楽しかった。

祖父は少し複雑な心境だったみたいだけど、私の技術が向上していくのを見るのが嬉しかったのか、どんどん教える内容は高度になっていった。

私は当然のように部活には入らず、同年代の女の子と放課後に遊ぶ事もせず、祖父の工房に入り浸るようになった。休日も同様で、少なくとも『普通の女の子のような青春』とは縁遠い毎日を送っていた。

それでも日常生活は問題なく送れていたし、学校で孤立したりもしなかった。これには私の幼馴染（おさなじみ）の存在が大きい。

「ファルナ、何してるかな……」

ファルナ・イカルガ。

六つ年上の幼馴染で、何かと私を気にかけてくれるお姉さん――というより、お母さん的存在。工房に籠（こも）りがちな私を、時に強引に引っ張り出してくれたり。小言を言いながらも、私の話を聞いてくれたり。何かと私を助けてくれる。すごく達観しているから、お姉さんというより、やっぱりお母さんっぽい。言ったら渋い顔をされるだろうから、言わないけど。

急に声が聞きたくなった。別に用がある訳じゃないけど、ちょっと話したい。私は机上の電話機を遠距離通話モードに切り替え、幼馴染（おさなじみ）の使っている周波数に呼び掛けた。

『――私だ。どうした？』

昼間だし、五回コールしても出なかったらあきらめようと思っていたけど、三回目のコールを待たずに通話が繋がった。ファルナだ。

「大した用じゃないんだけど、今、話せる？」

『ああ、問題ない』

いつも通りの低いトーンの落ち着いた声。だけど、何か騒がしい音が受話器の向こうから聞こえる。

「なんだか、騒がしくない？」

『実は仕事中でな。――ハン、お前が突破口を開け！　トドメはリンだ。いいな！』

『え？　私！？』

『お前の〈ライガーゼロ・オーガ〉はそういう機体だろう。援護はしてやる』

『大丈夫だ、リン。俺もフォローする！』

『うぅ……もう、判ったよ！』

ファルナ以外に、よく知った声が受話器越しに二人分聞こえた。

「えっと……もしかして取り込み中？」

『ん？　まあな。それで、どうし――あいつ……コアが二つあるのか！？』

珍しくファルナの声が動揺している。どういう状況なんだろう……。

『プラン変更だ！　私も前に出る！　リン、二機で奴の足を止めるぞ！　ハン、お前がトドメを刺せ！』

『一人でか！？』

『荷電粒子砲で奴を機体ごと薙（な）ぎ払え！　たまには使ってやらんと、いざという時に使えないからな。　それに、生半可な攻撃ではすぐに自己修復してしまう』

『だが、二人で足止め出来るのか！？』

『――ほう。ずいぶんと偉そうな口を叩けるようになったな、ハン？』

普段から低いファルナの声のトーンが、更に下がった。口調はいつも通りで、声を荒げてる訳でもないのに、殺気を向けられてるみたいな威圧感（プレッシャー）が、受話器越しでも伝わってくる。

『いや、そんなつもりじゃ……』

『私はやれと言ったぞ――判ったな？』

『りょ、了解ッ！』

受話器の向こうで、ファルナがチームメイトに檄(げき)を飛ばしている。多分、割りと緊迫した状況だと思う。

「……あの、忙しそうだから、かけ直すね？」

『すまない。そうしてくれ』

受話器をそっと置く。私の幼馴染はゾイド乗りで、名(な)うての傭兵だ。電話をかけたら仕事中だったというのは、実はよくある。仕事中なら、無理に出てくれなくてもいいのに。

もしかしたら、私だから仕事中でも出てくれているのかもしれない。

だとしたら嬉しいけど、未だに心配をかけているようで、申し訳なくも思う。

「ん～……！」

軽く伸びをして身体をほぐす。気分転換のつもりで電話をしてみたけど、それも叶わなかった。さて、どうしたものか。

パソコンのモニターに目を移せば、そこには先ほどと同じゾイドの仕様書。

「久しぶりにアレ、やってみようかな」

私は電話機を内線に切り替えて、研究室を呼び出した。

『――はい、研究室です』

通話に出たのは、先ほどの彼女だった。

「ロゼットです。仮眠を取るので、急用以外は繋がないように、他の所員にも伝えてもらえる？」

『判りました。ちゃんと休んでくださいね？』

受話器を戻し、私は椅子の背もたれを少し後ろに倒し、深く腰掛ける。両腕を肘(ひじ)掛けに載せ、目を閉じる。疲労が溜まっていたのか、眠りに就(つ)くのに、そう時間はかからなかった。

◆　◆　◆

「ん……」

目を開くと、私はゾイドのコクピットにいた。

といっても、これは現実ではない。限りなく妄想に近い、私の夢の中。

私はここで自分が設計したゾイドや、装備のテストをしている。私はゾイド乗りとしての適性が低いし、そもそも向いてない。でも、実際に乗って、使ってみないと判らない事は多い。よく、『技術者は現場の使い勝手を考えてくれない』なんて言われるけど、私もその通りだと思う。

設計に誤りがないか。想定した性能を発揮出来るか。基礎構造は足りているか。ゾイドコアの出力は充分か。装備の使い勝手は実戦に適しているか。

考える事はいくつもある。

そして、これらは実機を製作し、テストをしてみないと判らない。

だから、これはいわゆるイメージトレーニングに近い。イメージでなら、適性の低い私でも、戦闘ゾイドを操縦出来るから。

「さあ、始めよう！」

――グゥルルルルル………。

「あれ？」

いまいち機嫌が良くないらしい。私のイメージトレーニングは、こういった部分もリアルで、ゾイドの気性まで再現してくれる。ライオン型のゾイドは比較的扱いやすい傾向にあるけど、中には気難しい個体も多い。何が気に入らないんだろう……？

「……もしかして、名前が欲しいの？」

私の問いに、『そうだ！』とばかりにライガーが吼えた。

「そっか。ごめんね、君の名前は決まってるよ」

今度は『何だ？』とばかりにライガーが喉を鳴らす。ちょっとネコみたいで可愛い。

「〈怒り狂う獅子〉――それが君の名前だ」

現状で考え得る『究極のゾイド』。

もう二度と喪失わないために、残酷な運命に抗う力。

それがこの子。

「じゃあ、改めて。始めるよ――〈レイジングライガー〉！」

――グゥルオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！

イメージトレーニング上の幻聴だと判っているけど、〈レイジングライガー〉が歓喜に震えているのが判る。これまでに感じた事のないゾイドコアの生命力を感じる。

改めて思う――この子は完成すれば、究極のゾイドになる。

それから、様々なテストを行った。

〈ジェノクラウエ〉で培ったスラスター技術による、恐るべき運動性と加速性。

〈バニッシュラプター〉と〈ライガーゼロ・オーガ〉を経て、より進化した〈ストライク・レーザー・クローⅢ〉。

〈レイジウルフ〉から生まれた〈レイジ・システム〉と、その簡易版である〈ライガーゼロ・オーガ〉の〈Ｄ（ディスポーザブル）・Ｉ（イミテーション）・Ｒ（レイジ）・Ｓ（システム）〉、それらで得られたデータを基（もと）に、新たな仮説を盛り込んで構築した〈レイジ・システムⅡ〉。

他の装備に関しても、これまでのゾイドで得た成果を更に昇華・洗練させ、〈レイジングライガー〉には盛り込んだ。

こんな過剰な性能は正直、必要ないかもしれない。

けど、先日の事件で、〈ジェノクラウエ〉は改修が必要なほどに破損し、〈レイジウルフ〉も『エクシード・ドライブ』を使った反動で、しばらく戦闘不能になった。

あんな事がそうそう起こるとは思えないけど、起こらない保証などない。

『備えあれば憂いなし』って、東方大陸の諺（ことわざ）にもあるし、万が一への備えはしておくべきだ。

〈バニッシュラプター　全距離対応装備（サーバント）〉。

〈ラインハイト　ジェノクラウエ〉。

そして、この〈レイジングライガー〉。

「まずは〈レイジングライガー〉からだけど、やっぱり相当な出力のライオン型のゾイドコアが要るな……」

今回のイメージトレーニングで確信した。仕様書通りの性能を発揮するには、並どころか、〈ライガーゼロ・オーガ〉のゾイドコアでも、出力がまるで足りない。

だけど、そんな高出力のライオン型のゾイドコアは、恐らく存在しない。彼（か）の英雄、バン・フライハイトの〈ブレードライガー〉のゾイドコアでも無理だろう。

ならば、〈ライガーゼロ・オーガ〉クラスのゾイドコアの使用を前提にした仕様に変更すべきか？

否。それでは意味がない。私が造りたいのは『究極のゾイド』なのだから。

しかし、ありもしないゾイドコアの使用を前提にしたゾイドなど、それこそ夢物語だ。

技術者は意外とロマンチストだが、それは現実を直視した上でなければならない。

「……〈オーガノイド・システム〉なら」

バン・フライハイトは銀色の〈オーガノイド〉を連れていたらしい――そこからの連想だった。かつて、帝国と共和国が血眼（ちまなこ）になって追い求めた禁断の技術――〈オーガノイ

ド・システム〉。
その大本(おおもと)となるのが〈オーガノイド〉だ。
様々な事情から、〈オーガノイド・システム〉は使用が禁止され、技術として後世に受け継がれる事はなく、今では時代が生んだ徒花(あだばな)として語られている。
「――なんてね。技術者が倫理観をなくしたら、それこそ終わりだ」
馬鹿な考えを頭から追い出す。
「そういえば、さっきファルナが言ってたな。コアが二つ……か」
ゾイドコアが複数あっても、それは一つの身体に複数の魂が宿るようなものなので、主導権の奪い合いになるか、その異常な状況に耐えきれず、精神が崩壊してしまうだろう。
そういえば、複数のゾイドコアを『餌』とし、一つのゾイドコアに与える事で、強力なゾイドコアを生みだす実験には成功例があったはずだ。
「でも、これも倫理的にね……」
私はこの発想も思考から除外し、新たな可能性を模索した。

結局、考えても答えは出なかった。
なので、〈レイジングライガー〉のプランは、しばらくお蔵入りになっていた。
だが、思わぬ事態の発生により、〈レイジングライガー〉は陽(ひ)の目を見る事となった。
それは大きな犠牲を伴(ともな)う結果となってしまったけれど……。
これ以上の犠牲を出さないために。
これ以上の悲しみを生まないために。
〈レイジングライガー〉が、そのための『力』となる事を――私は願う。

FIN

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『とある技術者の切なる願い －レイジングライガー誕生秘話－』をお届け致します。

今年の11月に行われた『ＺＡＯＤ』第6回にてお披露目された『レイジングライガー』。その製作者である紙白さんから会場でお話を伺（うかが）い、設定面だけでなく、作品自体もまた、これまでに手掛けた作品で得たノウハウを投入した、まさに集大成であると感じました。

本作では紙白さんをロゼットに置き換え、あの日に感じた気持ちを表現してみました。なので、〈レイジングライガー〉の具体的な装備や、バトル描写については、またの機会という事で。紹介ページもありますし。

ここからは劇中で説明不足な点を補足させていただきます。本作はある程度『ゾイド』の知識と、紙白作品の知識がある事を前提にしており、ショートストーリーの枠に収めるため、説明もかなり省いていますので。

●時間軸

これはパラレルなＩＦ時間軸です。〈レイジングライガー〉のゾイドコアは、〈ライガーゼロ・オーガ〉と〈レイジウルフ〉のゾイドコアが融合したもので、〈ライガーゼロ・オーガ〉自体がＩＦ時間軸に登場する機体です。更に、このＩＦ時間軸ではハンが死亡しているのですが、本作では生存しています。なので、『ＩＦ時間軸の更にＩＦ』となります。理由は二つあり、単純にハンを登場させたかったのと、死亡していた場合の説明が長くなるからです。本作のテーマは、あくまで『レイジングライガーがロゼット＝紙白さんの技術の集大成である事』なので。

●先日の事件

これは〈レイジウルフ〉が『エクシード・ドライブ』を使用した戦闘の事です。これによって〈レイジウルフ〉は修理が必要になり、その期間にリンが搭乗していたのが〈ライガーゼロ・オーガ〉です。本作のＩＦ時間軸では、〈ジェノクラウエ〉が〈ジェノクラウエリペア〉になる原因も、この事件という事になっています。

●思わぬ事態の発生により、〈レイジングライガー〉は陽(ひ)の目を見る事となった

これは〈ライガーゼロ・オーガ〉がゾイドコアに致命的な損傷を受けた戦闘と、それによって〈レイジウルフ〉のゾイドコアと融合した件を指します。その後に『大きな犠牲を伴う結果となった』とありますが、それは融合した二つのゾイドコアの事です。紙白さんから戴いた設定に『もう二度と喪失(うしな)わないために・・・残酷な運命に抗う力をその手にして！』という印象的なフレーズがあったので、他にも犠牲があった可能性はありますが、現時点では僕の妄想の域を出ていません。

●その他

彼(か)の英雄、バン・フライハイト→アニメ版主人公

〈オーガノイド・システム〉→バトルストーリーとアニメ版の設定をミックス

コアが二つ→元ネタは『ゾイドジェネシス』の〈デッドリーコング〉

ざっとではありますが、補足でした。他に疑問・質問などあれば、ウェブ拍手などでお送りください。

そろそろ謝辞を。

まずは原作者であり、本作を書くきっかけをくださった紙白さんに感謝を。今回も企画にご協力くださり、ありがとうございます。ちょうど一年ぶりくらいに紙白さんの世界観で書きましたが、まだまだ書いてみたい気持ちになりました。ゾイドの改造はしばらくお休みとの事でしたが、また新たな作品で僕の心を奪ってください。この気持ち、まさし愛だ！（笑）

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。紙白さんの作品は単体で素晴らしいものです。僕が書かせていただいている小説が、その素晴らしさを伝える一助になっていれば幸いです。

２０１５／１２／１　流遠亜沙

感想を書く

『Gallery of KAMISHIRO Side ゾイド』ページに戻る